

昨年夏の夏のある日、未知の方F子様からの書状を受け、開封した。

F子様は、子供たちが文通しているE子さんのお母様であることが直に判り納得できたものの、読み進むうち慄然となった。Eさんと子供たちの間の文通を今後取止めて欲しいと、卑屈とも思える程、懇願されているのであったが、私の心をうそ寒くするような頑強さがひそんでいた。懇願の形をとりながら、明らかに強要なのである。

Eさんと子供たちの間に文通が生じたのは春からで、Eさんがお小遣いを貯めたお金を、寄付して頂いたのが縁で、その後Eさんから度々手紙を頂いたし、子供たちもその都度御便り差しあげていたのであった。文通が重なるにしたがって親密の度も深まったころになって、とつぜん、Eさんの母たる人からの文通拒絶の手紙が舞い込んだのである。拒絶の理由は、手紙に附着している癩菌が、Eさんに伝染するようなことになっては、との懸念に依るのである。F様はこちらから差上げる手紙が完全に消毒をされていることを御存知なのに尚万一のことを気遣うの余り、恐怖がつきまとうのだそうで、全く始末のつかない、病的な恐怖感である。結核を病んでEさんたちとも別居生活をして居られ、最近特に病勢がつのり、夜も晝も睡眠が採れず、ひどく神経が昂ぶっていらっしやるようで、若し感染するようなことがあつてはと、無精に気になり一層眠れず、衰弱は増すばかり。しかし、Eさんの心に芽生えている優しい心を、斯のような形で摘み取ることは心苦しく、拒絶状を書こうと思いついたが、困り果て、主治医に相談したところ、主治医はそのような文通は取止めさせたほうが安全であろうと答えたらしく、それでやっと決心がついたと云う。

F子様の危惧は癩に就いての無智識によるものである。癩が慢性伝染病であつても、結核や、コレラ、チフスなどと違って、伝染力が微弱で、常に患者と接触している看護婦や医師にすら感染するものではないことを御存知であれば文通に依る感染を危惧されるなどあり得る筈がなかったのである。しかし乍ら、無智識のためにとあれば許容することも私には出来たが、相談を受けた医師の、無責任な発言は許せない。医師である以上、どの様に蒙昧な性であろうと、文通に依る伝染など決してあり得ないことを説いたなら、F子様の病的な不安は霧散したであろうし、Eさんに對する親切ともなつたであろうに、天職を持つ医師として余りにも浅薄に過ぎる行為である。このような医師が数多く存在するなら、癩事業関係者の啓蒙運動なるものも、進捗覚束ない。その医師の行為は無知識な一般人と何ら変わるところが無いではないか。

私は憤懣のやり場に困じた。F様が、事前に主治医の意見を聞かれていないのであれば、私はFさまの危惧を解くために努力することが出来た。が、癩を病む私が今更癩の智識を開陳した處で、F様を啓蒙出来そうになかった私は書きかけた手紙を破棄し、拒絶状を甘んじて受ける結果になつた。

書状を受けて最も憂慮したのは、子供たちが深い愛情を寄せて頂いている他の多くの人たちにまで不信を抱きはせぬかということで、私は拒絶状に就て秘密を保つことにしたのであった。Eさんから便りが無くなれば自然に文通は消滅すると考えたのである。私の思惑通りになつてけりはずだったが、一年過つて夏を迎えた今、昨日のことのように思い出されて、いやな気持ちになつている。Eさんの心に芽生えていた優しい芽を摘み取つた無智は余りにも悲しい。己の無智を子供にまで押し付けた母は哀れである。患者の無智を啓こうとしなかつた医師は憎い。無駄とは判つていても、癩に對する正しい認識を與えるための、努力を怠つた私も愚かである。

(昭和27年10月10日)